

2013年  
12月3日  
火曜日

市川文彦 教授（経済史学）

# 経済の成長と心の拠りどころ

\*聖句・「神は わたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けて下さる。」

## I

私が担当する専門ゼミ（研究演習）では毎秋、ロシア短期研修を実施、ゼミ生諸君が日本海対岸のウラジオストク市を訪れ、国立海洋大MSUで日露学生交流や発表を行います。既に14回目ですが、近年はロシアで始まった経済成長と、その影響が実感され、街並みが綺麗に、大架橋のような様々なインフラ整備が、また物価上昇が目につきます。

ロシアの、この変動は成長に伴う社会の不確実性をも同時にもたらしています。若者たちの（極く）一部は、このような不安定な雰囲気の中で、心の平安を得る場を教会堂の内側へ見出そうとしているようです。その一端を、私たちは今秋のロシア研修で体験。研修期間の日曜日に、近郊のロシア正教の修道院を訪れ、礼拝に預る機会を得ました。日曜礼拝では確かに家族連れや若者たち

の、幾つもの老若男女のグループが敬虔な祈りを捧げていました。今朝、舟木 讓先生に読んで頂いた聖句「詩篇」46:2（\*）の如く、我々が退避をし、身を寄せるところとしての神の存在が、まさにロシアで一部の若者によって意識されています。その神々しい雰囲気は礼拝堂の後にしながら、日本では高度成長期や不況期の宗教ブームが新興宗教へと繋がったのに対して、ここでは伝統的なロシア正教へ回帰する、この彼我の対照性も興味深く実感。

## II

このような成長期の社会変動ばかりでなく、逆に不況期の失業率上昇も、人々が抱く将来への不安感をもたらすものです。ユーロ危機を脱しつつあるフランス、英国では従来まで若者の教会離れが目立ちましたが、その一方でストレスをもたらす社会の動きを反映し若者が心の平安

を信仰や教会を通じて得ようと、新たに教会に通い始める状況もみられるように。

英国では、メソジスト教会はじめ幾つかの教会が学校、団体等と共に、失業中の若者、就職希望の高校生への職業訓練、職場体験の仲介、グループ・ワークから成る教育プログラム「Youth Service」の実践に取り組んでいます。また一部の教会は教会堂内部の補修工事などを、失業中の若者の職業訓練の場、あるいは一時的な雇い入れの場として提供しています。メソジスト教会は宗派を超えて英国国教会とも協同しながら同プログラムを推進。教会が社会的教育の機能を引受けたり、失業対策の一部も担いながら、必ずしも信仰心を持たない若者たちと新たな関係を築こうとしています。興味をひくのは職業訓練校に通う如く教会に足を運ぶ若者たちの中には、教会に

出入りし牧師や教会員たちと会話を重ねるうちに自然に信仰に目覚めて、自発的に礼拝に参加する人々も生ずる、という現象。我が研究対象のフランスでもカトリック教会が史上、様々な社会的活動のセンターの一つに。教会は社会的カトリシズムの拠点として労働者の生活条件の改善に寄与してきました。

## III

神様と人との内省的な対話の場としての教会が公的システムに先行した福祉ネットワークを形成する歴史的役割（仏）を負ったり、今や職業訓練スキルを身に付ける場（英）として、心理的不安を解消する精神的シェルター（露）として、新たに拡張された様々な心の拠りどころになっている状況は注目に値します。皆さんは、これを如何に感じましたか？